思う。

要するに、やる気がなくて不決着なのか、やる気があるから不決着なのかの違いなのだろう。

やる気がなくて不決着というのはかなわない。

やる気のない者に「やる気を出せ」とハッパをかけて、やる気が出るものではない。

少子時代の子育てのポイントは、子どもを栄養過多で根腐れにしてしまわないことである。

ものが無いから、無くて我慢させるというのは、どうしようもないからとにかく我慢させることになる。

ものがあって、無しで我慢させるというのは、それに比べると大変難しい。分からせようとすると、子がむずかるので、むずからないようにさせようとして、親の方が我慢できなくなる。

子どもが辛そうにしているのを、無しは無しのままでなんとかやっていくまで、親がじっと耐えなくてはならないので、子に我慢させるというより、親が我慢することができるかどうかである。

とにかく親が子を見守り過ぎて、先ざきの配慮をしてしまうことで、子は安全無難の道を歩くことによって試行錯誤の機会を奪い取られがちになるのが、少子化時代の育児のおとし穴というものであろう。

長寿時代の少子化で、子どもたちが、長い期間にわたっての子ども期をいかに充実して過ごすかが、その後の老人たちを背負う肩の強さにひびいてくる。

勉強だけできて、成績で評価してもらう以外に自信がなくて、いつまでも学生がやめられない。世間に出るのがこわい、という〝モラトリアム〟も、確かによく目立つ。

それが、もともと子どもの群れのなかでの対人関係をあまりにも味わわなかったがための、社会性の欠落であるのも、確かである。

ただそれらは、かばってもらえる大人の配慮の中へ逃げ込めたから、ついそういう社会からの逃げ方を心得てしまったのであって、意外に、子どもの群れの体験に乏しい子ども時代を過ごした者でも、逆に節度のある大人に囲まれて育った心の豊かさがあるなら、好ましい社会性を、大人なってから無理なく発揮し得るものである。

少子化時代の子どもは、節度のある大人たちに囲まれて育つことによって、粗造りで、粗野な躍動を、子どもであるがゆえに子どもの原型として、心にたたえる子どもであり得るものだと思う。

放ったらかされたゆえの粗雑と、節度ある接し方で育てられた粗造りとは、基本的に違う。少子化時代の子育ては、いよいよ後者が可能だ、ということではないだろうか。

いま時の子ども論—大人になりたくない子どもたち

まず、いま時の大人論を提起することから

静岡大学教育学部教授◆馬居　政幸

1　大人になりたくないのは本当か

「少子化時代」と「大人になりたくない」という言葉への私なりの観点を提示することから始めたい。まず、少子化時代だが、日本は既に、一九五〇年代末から少子化時代であることを確認したい。現在の問題は少子化時代に生まれ育った子どもが〝大人になり〟、子どもを産み育てる段階で生じた現象。少子化時代の子ども論は、かなり時間の流れを逆上った〝いま時〟に向ける必要がある。

「大人になりたくない」はどうか。本当に、いま時の子どもはこのように思っているのか。質問紙調査ではイエスと回答する者が多数派かもしれない。だが、大人になるということに、調査者（大人）と回答者（子ども）の間にどれほどコンセンサスがあるか。問うべきは、大人になりたいかどうかの回答率の高さではなく、〝少子化時代〟の子どもにとっての〝大人になる〟ことの意味ではないか。

以上の二つの観点を、最近私が耳（目）にした三つの言葉を手がかりに展開することから課題に答えたい。

2　小学校しか出ていなくても

まず最初は、矢口高雄氏のマンガ『蛍雪時代—ボクの中学生日記』（講談社）で見出した次の言葉である。

①「タカオ君を是非高校に進学させていただきたいのです!!」

本書は矢口少年の中学三年間を舞台に、高度成長期以前の東北の農村の生活を矢口氏独自の精緻な描写によってリアルに描いた作品（全五巻）。少子化時代以前の子どもの世界を知る上で最も優れた書である。

その最終巻。生徒会長の矢口少年も、当時の多くの中学三年生と同様に、卒業後東京に就職することが決まった。

担任の小泉先生は、彼の才能を惜しみ、八キロの暗い雪道をかきわけて家庭を訪問。父親に正座で頭を下げつつ発した言葉が①である。だが、父親の返事は「できる相談じゃねえ」。それから小泉先生の説得は三時間に及び、高校生の矢口少年が誕生する。その過程で、「いかせてもらえるなら　授業料以外は一銭もいらねえ!!」と叫ぶ息子を前にして、父は小泉先生にむかって語る。

「だいいち　これまでこの村から　高校さなんか入ったヤツが一人でも　いるか!?　そんなとこさ　生まれたおめえが　なんで入る必要あるだ　おらだって　小学校しか出てねえけどリッパに生きている!!」

高校進学と〝リッパに生きる〟ことは関係ない。父の反対は貧しさだけが理由ではなかった。〝大人として〟生きる基準が異なるからであった。

それから四十数年、子どもの世界はどうなったか。

③　大人にはなったけど

昨年（一九九五）十一月、教授会で四年生の半数が就職先未決定のため状況把握を、との報告を受けた。私の研究室にも公務員試験に落ちた女子学生が二人おり、卒論指導の際に「就職どうするの」と尋ねた。

②「しかたがないです。家に帰って、来年もう一度受けます」

これが答え。二人の表情に暗さやとまどいを見出せなかった。私は複雑な気分になった。マスコミでは連日のように女子学生の就職状況の厳しさが報道されている。だが、当の本人たちの深刻さはどれほどのものか。マイクを向けられれば困難さを訴える。それだからといって明日生きる糧もない、というわけではない。親元に戻ればなんとかなる。大学受験失敗と同じ気分のようである。

矢口少年にとって就職は生活のため、進学は生活苦と直結する。だから小泉先生も正座で頭を下げた。だが、私の知る限り、学生からそのような深刻さも覚悟も感じ取れない。彼ら彼女らにとっては、卒業後に就職することが決まっているから試験を受けるにすぎないのではないか。かつて、理由なく高校や大学に進学することが問題にされた。同様のことが就職の世界にも生じているといえまいか。

もう一つ最近ショックを受けた言葉を紹介したい。

③「仕事か家事かは趣味の問題でしょ！」

やはり昨年十一月、静岡市教育委員会が主催するヒューマンカレッジで講演をした際に、受講者から出た言葉である。受講者の中心は三十歳前後の男女、私のテーマは「二一世紀をひらく新たな男女の関係学」。戦後五〇年における男と女の関係の変化を、男女平等、男女共同参加、男女共同参画という概念の変遷を軸に、少子化の進行と重ねつ

つ論じた後に、「男女が共に仕事も家事・育児も担うことが二一世紀をひらく条件と考えるか？」と受講者に問いかけた結果である。私は戸惑った。男女が共に担うという答えが返ってくるものと思っていたからである。彼ら彼女らにとって、仕事と家事・育児の選択は趣味の問題、嫌いならしなければよい、ということであろうか。

多分、この二つの答えに、何を甘いことを、と憤る方もおられよう。そのとおりである。だが、その前に考えてほしい。なぜ彼ら彼女らがこのように答えたかを。

ヒントは〝少子化時代〟と〝大人になる〟の意味。現在三〇代の男女こそ、日本で少子化が定着して以後に生まれ育った最初の世代であり、それに続く世代が私の学生。そしてそれは、一五歳で生きるために職に就く道を選ばざるを得なかった矢口高雄の少年時代と、〝いま時の子ども〟が生きる時代の間に生じた最も大きな変化である。

④　少子化時代の成立

戦後五〇年間を子どもの出生数でみると、一九四九年の二七〇万人と七三年の二〇九万人をピークにする二つの山（ベビーブーム＝団塊＋団塊ジュニア）と谷（少産）がある。最近の少子化現象は戦後二度目の谷。合計特殊出生率（女性が生涯に産む子どもの平均値）でみれば、一つ目の谷である五〇年代の減少幅がはるかに大きい。出生数も一五〇万代（六〇年）にまで減少する。家に子どもが二人という少子家族は一九六〇年前後に定着し、第二次ベビーブームは出生率ではなく親の増加の結果。団塊ジュニアもまた少子化時代の子どもである。

他方、矢口少年が村で初めて進学した高校の進学率は、子どもの出生数の変化とは対照的に、大学とともに戦後一貫して上昇。一九七五年にピークに達して以後、高校は九割以上、大学（含む短大）は四割近くで推移する。ただし七六年にスタートした専修学校等を含めれば、高校卒業後に進学する者は九五年度に同学年の約七割に達した。

この出生数と進学率の変化を重ねるとどうなるか。高校・大学進学率がピークになる七五年の一五年前は六〇年、最も出生数が減少した年。日本の戦後の選抜システムは、子どもが最も少ない時期に確定した。そこに人口の二つ目の山が押し寄せた。受験者増に対し進学率を一定にするなら定員増、定員を一定にするなら別の受け皿が必要。前者が高校新設、後者が専修学校等の新設である。さらに、四大・短大・専修学校等の校種の差が卒業後に経済効果や社会的威信の差でランク付けされ、各ランクへの進学可能性で高校のランクが決まり、新設順に高校が次々と下位にランクされればどうなるか。九割以上の進学率を維持するた

め の 高 校 増 設 は 大 学 入 学 可 能 性 の 拡 大 で は な く、 進 学 可 能 性 で 序 列 づ け ら れ た ト ラ ッ ク の 細 分 化 に す ぎ な く な る。

そ の ト ラ ッ ク に、 多 数 の 子 ど も を 一 人 も 落 ち こ ぼ す こ と な く、 公 平 に 振 り 分 け る に は、 誰 も が 納 得 す る 基 準 が 必 要 に な る。 そ の た め に、 中 学 校 が 用 い た の が、 教 科 を 構 成 す る 知 識 の 理 解（記 憶）量 と 操 作 時 間 の 速 度 の 差 を 一 元 的 に 配 列 し た 数 値（偏 差 値）で あ っ た。 子 ど も た ち の 一 五 の 春 を 泣 か さ な い 教 師 の 教 育 愛 が、 偏 差 値 を 要 求 し た わ け で ま る。 そ の 教 師 の 一 人 に、 矢 口 先 生 の た め に 雪 道 を 歩 い た 小 泉 先 生 も ま た 入 ら ざ る を え な か っ た で あ ろ う。

その結果育った大人が先の②と③の発言の主である。そして、第二の少子化は上記のシステムの終えんを意味する。

⑤ 問題は子どもなのか

矢口少年の父にとって、〝大人になる〟とは仕事をして家族を養うことではなかったか。進学を願った息子もそのことは当然のこと。だから、父は小学校卒でも〝リッパに生きている〟と先生に言い切り、息子は〝授業料以外は一銭もいらねえ〟と叫ぶことができた。

他方、〝来年もう一度〟と気軽にいった四年生は団塊ジュニアのピークの七三年生まれ。仕事と家事・育児を趣味の問題にした三十前後の男女は少子化定着後の六〇年代後半生まれ。細分化した受験競争のトラックを走り抜いた先輩と後輩である。彼ら彼女らにとって、〝大人になる〟とは、高校→大学→企業というゴールをどの位置で入るかということ。生きる糧は父の責任。家事・育児は母の責任。自分の責任は両親の期待に応えてより上位のランクを獲得し、自分の可能性を最大限に発揮すること。その自己実現の世界に家事・育児も生活のための仕事もない。

このような少子化時代に生まれ育った者の未熟さを非難することはたやすい。だが、その前に、矢口親子の〝大人になる〟条件に代わって、トラックを走る彼ら彼女らを支え激励したのは誰なのかを考えてほしい。何よりも、より上位のトラックに入ることこそ大人になる条件と教え、正確に配分することを職業とした者は誰なのかを。

少子化時代の子どもを論ずる前に、彼ら彼女らを教え育てた側の子ども観を問い直してほしい。そのために、矢口少年の父と比較して、何を与え、何を奪ったかを考えてほしい。さらに、われわれ自身がどれほど〝大人である〟条件を満たしているかを省みてほしい。そして、上記システム終えん後の日本社会で大人として生きる条件と比較してほしい。その作業の過程で、目の前の〝いま時の子ども〟の姿は自ずと見えてくるであろう。大人論を裏返せば子ども論になるはずだから。

いま時の子ども論—大人になりたくない子どもたち

とらわれた「子ども」観時代の子どもたち

東京学芸大学助教授◆葉養　正明

いまどきの子ども論の「いまどき」

いまどきの子ども論が論じられはじめて大分たつ。それらの子ども論に登場するキーワードを拾い上げてみれば、新人類、究極人、エイリアン、宇宙人、異星人、異人等多数の造語があてられてきた。いずれも、大人には理解しがたい感性、行動様式、思考パターン等を身につけた子どもたちの出現を表現しようとする言葉である。以来、子どもは本当に変わったのか、それとも子どもは子どもで本質的には変化するはずもなく、変化したように見えるのは表層だけだ、と考えるべきなのか、という論争が戦わされてきた。

しかし、いまやこのような議論は「いまどき」のものではなく、むしろ論点は、どのように変化したか、変化のなかみはどうなっているのだろうか、という点に移っているかのように見える。

地域の意味

子どもの心の世界が本質的に変わってしまったのか否か、という論点はさておき、少子化という時代の趨勢のなかで、ひと昔前の子どもの実態——がき大将を中心に、近隣の子どもが群れをなし、遊び、けんかをしながら人間関係の作り方を学び、また、さまざまな人生の知恵も学んでいった——が既に過去のものであることは紛れもない事実になってきている。それは、私たちがそれぞれの地域で子育てをし、暮らしながら実感している日常であるとともに、「子どものナワバリ」を研究し続けている梶島邦江氏（聖徳大学）のデータにも、明瞭に読み取ることができる。

現代教育科学／1996年2月号 No.471

特集 少子化時代の子ども像を解くカギ

●いま時の子ども論—大人になりたくない子どもたち
粗造りで粗野な躍動が、子どもの原型……伊藤 友宣 5
まず、いま時の大人論を提起することから……馬居 政幸 9
とらわれた「子ども」観時代の子どもたち……葉養 正明 13

●証言・少子家族の男の子・女の子—どんな変化が見られるか
集団へなじめない子が増えている……伊藤 孝之 17
「遊び」から現代の子ども像を探る……末永 賢行 21
時代は、ニューハードワーカー……増田 義人 25
マイナス思考で見てしまうと……菅沼 行生 29
こんなになったのは、あなたのせいよ！……小田原誠一 33
「自己主張の少なさ」と「幼さ」……前田 康裕 37

戦後の子ども観を見直す—子どもの社会史の視点から……明石 要一 41
「参画」は自立した子どもを育てる……大森 修 47

●少子化時代の「子どもの世界」を解くキーワード
父親像・母親像—親までがモラトリアム志向？……丸尾 清一 53
教師像—よき相談相手であれ……土作 彰 56
友だち—コミュニケーションの仕方を学ぶことの重要性……中野 浩彰 59

宿題—知的要求を喚起する「宿題」へ……松野 孝雄 62
塾通い—「塾・習い事」の三つの傾向と子どものつぶやき……渡辺 喜男 65
学校のきまり—集団生活の魅力を引き出す改善を……高橋 正和 68
学業成績—「学業成績」は、学校の存在性をアピールする……藤縄 英治 71
問題行動—「問題行動」としての「いじめ」の構造と変化……阿部 昇 74
性差意識—アンケートによる調査から……高橋 勲 77
金銭感覚—子供の感覚・大人の感覚……大串 正弘 80
ファミコン—対人関係の省エネ化……黒木 俊治 83
公民感覚—弱い子どもたちのぞしい公共感覚……横田経一郎 86

教育ニュース・スクムアップ
1 五日制問題で各団体が意見具申
2 中教審の議事要旨① 第一小委……安達 拓二 89

★連載／雑誌批評・11……木原健太郎 97
生活・文化の学習

★連載／法則化運動のこれからの課題・11
向山洋一教え方教室……向山 洋一 101

◆連載／授業ディベートの論題開発・11
ディベートにおける論題の位置づけ……岡山 洋一 西澤 良文 106

★連載／モラルジレンマの教材開発・11
モラルジレンマ授業へのわれわれの取り組み(5)……荒木 紀幸 森川 智之 111

（表紙写真提供・㈱モントレ）